

令和4年度 第56回 中学生の「税についての作文」
まちだ納税貯蓄組合連合会優秀賞

「ふるさと納税と、父の故郷」

町田市立薬師中学校 3学年 前岡 里奈

インターフォンが鳴り、宅配業者から荷物を受け取る。発送元は馴染みのない、地方の自治体だ。すぐに「ふるさと納税の返礼品だ」と気づく。要冷蔵、要冷凍の返礼品は急いで開封し、中身を冷蔵庫、冷凍庫に入れる。箱のままでは入らないからだ。以前、要冷凍のものを冷蔵庫に入れてしまったことがあったので、よく確認する必要があるが、今となつては手慣れた作業だ。

ふるさと納税は正確には「納税」ではなく、「寄附」という。都市部に集中する税収を、地方に還元するために作られた制度であり、制度を活用することで住民税、所得税の控除を受けることができる。「生まれ育ったふるさとに貢献できる制度」であり、故郷の事業者への支援にもつながるのだ。

ふるさと納税サイトの広告は、テレビやネットで頻繁に目にする。税そのものではないが、税に関連するものとしては、中学生の私にとって、日々の買い物で支払う消費税の次に身近な存在だ。返礼品には自治体、事業者の工夫が大きく反映されていて、人気の高い返礼品はどれも魅力的だ。

「多くの人が返礼品目当てで、ふるさと納税を活用している」と報じられている。実際、私もつい最近まで、返礼品が届いても、その地域に考えを巡らせることはなく、返礼品が食品の場合は、「これは美味しいな」程度にしか考えていなかった。

当然、両親も返礼品目当てで、ふるさと納税サイトの人気ランキング上位から自治体を選んでいっていると思っていたが、ひとつだけランキング下位の自治体が混じっていた。その自治体の返礼品はあまり魅力的ではなく、なんでこんな返礼品を選ぶのかなと不思議に思った。母に聞いてみると、その返礼品は父が幼少期を過ごした自治体のものであった。

父の故郷は、昭和の終わりから人口減、高齢化が続き、五年ほど前の豪雨によって、甚大な被害を出している。父は、故郷の復興を応援するために、ふるさと納税を行っているのだ。

二〇二二年七月に総務省が発表した「ふるさと納税に関する現況調査結果（令和四年度実施）」によると、寄附総額は八、三〇二億四、〇〇〇円、寄附件数は四、四四七万三、〇〇〇件で、ともに過去最高を更新している。増加の背景には、巣ごもり需要の高まりがあるという。

地震や豪雨、新型コロナウイルスの蔓延などによって、日本各地でさまざまな被害が頻発している。地方を応援するために、本来の目的でふるさと納税を活用している人はかなり増えているのではないだろうか。

私にとってふるさと納税は、日本における都市部への人口集中と、税収の不均衡、地方の再生について考えるきっかけとなった。これからも興味を持って考え続けてい

きたいと思う。